

鳥栖市文化財調査報告書第72集

横  
井  
古  
墳  
群

# 横井古墳群

鳥栖市文化財調査報告書第72集

2004

鳥栖市教育委員会

二〇〇四

鳥栖市教育委員会

# 序

本書は、真砂土採取に伴い、埋蔵文化財緊急発掘調査を実施した、鳥栖市神辺町に所在する横井古墳群の調査報告書です。

本報告書を通して郷土の文化財に対して一層のご理解をいただき、また、学術文化の向上に幾分か寄与するものであれば幸いに思います。

最後になりましたが、開発と文化財保護との調整に、ご理解とご協力をいただきました、事業者である株式会社山本建設建材、また、発掘作業や整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

平成16年3月30日

鳥栖市教育委員会

教育長 中尾 勇二

## 例 言

1. 本書は、真砂土採取に伴い、埋蔵文化財緊急発掘調査を実施した、鳥栖市神辺町字都谷1212、1213-12、1214に所在する横井古墳群の調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社山本建設建材（代表取締役山本辰雄）の委託を受けて、鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、株式会社山本建設および原武登記測量事務所の協力を得た。
4. 出土遺物の整理を含む報告書作成作業は鳥栖市藤木文化財整理室で行った。
  - ・遺構実測は、権藤イツヨ・松崎友子・久山高史が行い、測量基準杭設置は原武登記測量事務所の協力を得た。
  - ・遺構・遺物写真撮影は久山が行った。
  - ・遺物整理は権藤イツヨ・松崎が行った。
  - ・遺物実測は中島貞子・久山が行った。
  - ・図面トレースは毛利よし子・権藤由美子が行った。
5. 鳥栖市文化財保護審議委員の小田富士雄先生（福岡大学）より出土遺物についてご教示をいただいた。
6. 本書の執筆・編集は久山が行った。

## 凡 例

1. 本書で報告する古墳の位置する支群を「1区」とし、名称を横井古墳群 ST101古墳（1区1号墳）とした。
2. 方位は座標北である。

# 本文目次

第1章 調査の概要	1
1. 調査の経緯と組織	1
2. 遺跡の位置と環境	3
第2章 ST101古墳の調査	4
1. 古墳の位置と現状	4
2. 墳丘・外部施設	4
3. 埋葬施設	4
4. 出土遺物	7
第3章 まとめ	10

# 挿図目次

図1 周辺の遺跡分布 (1/10,000)	2
図2 調査区位置図 (1/5,000)	3
図3 調査区平面図 (1/60)	5
図4 ST101古墳石室 (1/40)	6
図5 ST101古墳玄室床面遺物出土状況 (1/20)	7
図6 ST101古墳出土遺物 (1/3)	8

# 表目次

表1 ST101古墳出土遺物一覧表	9
-------------------	---

# 写真図版目次

図版1	1. 調査区遠景 (南西から)	2. 調査風景 (北から)	3. ST101古墳全景 (南から)
図版2	1. 墳丘基底部 (北東から)	2. 墳丘前面列石 (東から)	3. 同 左部分 (南から)
図版3	1. 玄室奥壁 (南から)	2. 同 左側壁 (東から)	3. 同 右側壁 (西から)
図版4	1. 玄門袖石 (玄室から)	2. 玄室床面 (前室から)	3. 供献土器検出状況 (西から)
図版5	1. 供献状態の復元	2. 出土遺物	
図版6	出土遺物		

# 報告書抄録

ふりがな	よこいこふんぐん							
書名	横井古墳群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第72集							
編著者名	久山高史							
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 TEL 0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦2004年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこいこふんぐん 横井古墳群	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市	410213	—	33° 23′ 44″	130° 29′ 17″	20030519 ～ 20030528	約300m <sup>2</sup>	真砂土採取 に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
横井古墳群	古墳	古墳	横穴式 石室墳	須恵器・土師器			玄室床面より未盗掘の状 態で供献土器のセットを 検出	

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査の経緯と組織

平成15年2月26日付で、株式会社山本建設建材（代表取締役山本辰雄）より鳥栖市神辺町字都谷1212、1213-12、1214の山林10,393m<sup>2</sup>について、真砂土採取に伴う埋蔵文化財確認調査の照会及び依頼が鳥栖市教育委員会に提出された。対象地域は周知の埋蔵文化財包蔵地（横井古墳群）内にあるところから、生涯学習課文化財係では3月12・13日に確認調査を実施した結果、対象地内に古墳時代後期の横穴式石室墳が5基分布することを確認した。そのため事業者と協議した結果、このうち4基の古墳については、切土の計画を変更して影響のない処置をお願いし、やむを得ず削平される古墳1基とその周辺約300m<sup>2</sup>について、事前に本調査を実施し、記録保存をおこなうことで開発と文化財保護との調整を測ることで合意した。平成15年5月19日に埋蔵文化財発掘調査委託契約書を鳥栖市長と開発者である株式会社山本建設建材との間で締結した。

調査は、平成15年5月19日より平成15年5月28日にかけて発掘調査が行われた。出土遺物・調査記録類の整理ならびに調査報告書作成業務は、引き続き鳥栖市藤木文化財整理室において実施した。

調査の組織は以下のとおりである。

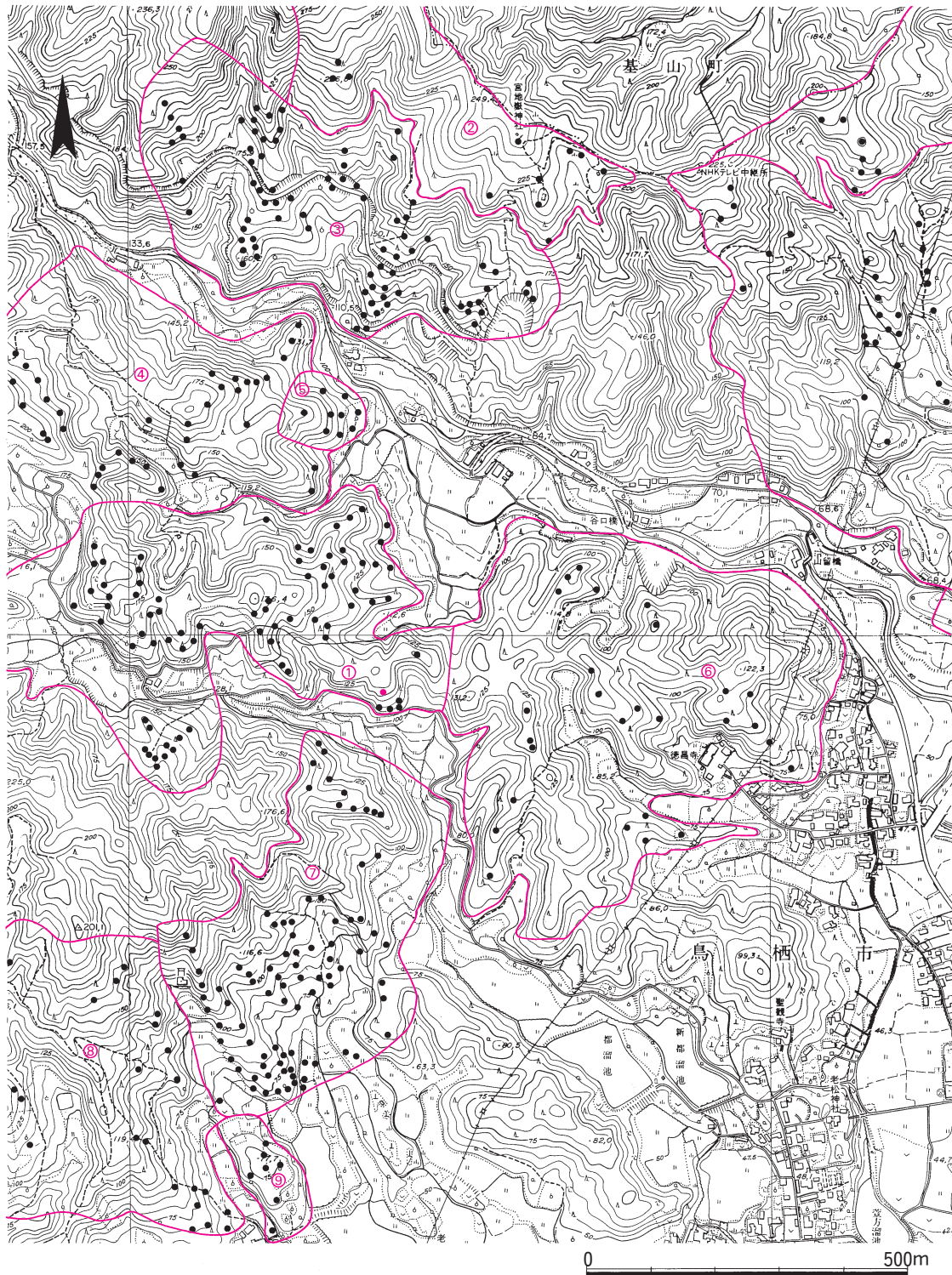
委託者	山本 辰雄	株式会社山本建設建材代表取締役
受託者	牟田 秀敏	鳥栖市長
調査主体	鳥栖市教育委員会	
総括	中尾 勇二	教育長
	近藤 繁美	教育部長
	西川 和彦	生涯学習課長
	藤瀬 禎博	生涯学習課長補佐（市誌編纂係長兼務）
庶務	田中 啓子	生涯学習課生涯学習推進係事務吏員
	久山 高史	生涯学習課文化財係主査（本調査・報告書作成担当）
調査	島 孝寿	生涯学習課文化財係事務吏員（事前確認調査担当）
調査協力	株式会社山本建設建材・原武登記測量事務所	

### 現場発掘作業従事者

諸永 正利	諸永 幸子	仁田 利宣	末安志津子	松隈マチ子	大野 勝子
宮地 貞子	栗山 満恵	権藤イツヨ	松崎 友子		

### 室内整理作業従事者

中島 貞子	松崎 友子	権藤イツヨ	毛利よし子	権藤由美子
-------	-------	-------	-------	-------



- ①横井古墳群 ②杓子ヶ峯古墳群 ③東十郎古墳群 ④十三塚古墳群 ⑤深底古墳群  
 ⑥門前古墳群 ⑦都谷古墳群 ⑧牛原古墳群 ⑨城山古墳群

図1 周辺の遺跡分布 (1/10,000)



## 2. 遺跡の位置と環境

鳥栖市の北部に大きく横たわる背振山脈の山麓は、6世紀後半以降、群集墳が多く分布することで知られるが、とくに大木川上流域の峡谷部は、佐賀県東部では最大の群集墳密集地帯となっている。大木川は律令時代以降、基肄郡と養父群の境界をなしたと考えられているが、この上流域の峡谷は奥が深く、急傾斜の丘陵が多く派生している。そしてこの一帯には古墳の用材となりうる花崗岩の巨石が多くみられる。鳥栖市神辺町に所在する横井古墳群は、これらの中では西側の丘陵に位置する。周辺の東十郎古墳群、杓子が峰古墳群などとともに、これらの中でも比較的標高の高い地点に立地する古墳群である。なお、これらの古墳群は、この周辺の遺跡を周知化するにあたって、主として字ごとに大きくグルーピングしたものにすぎない。したがって、群集墳としてのまとまりや支群の単位については、必ずしもグループ（氏族）を単位とした造営当時の状況を反映したものではない。同じ丘陵上に立地する古墳をひとくくりにした横井古墳群についても、各古墳の開口する小溪谷が北側に分布する古墳と南側のそれとは古墳群としての単位が明らかに相違する。

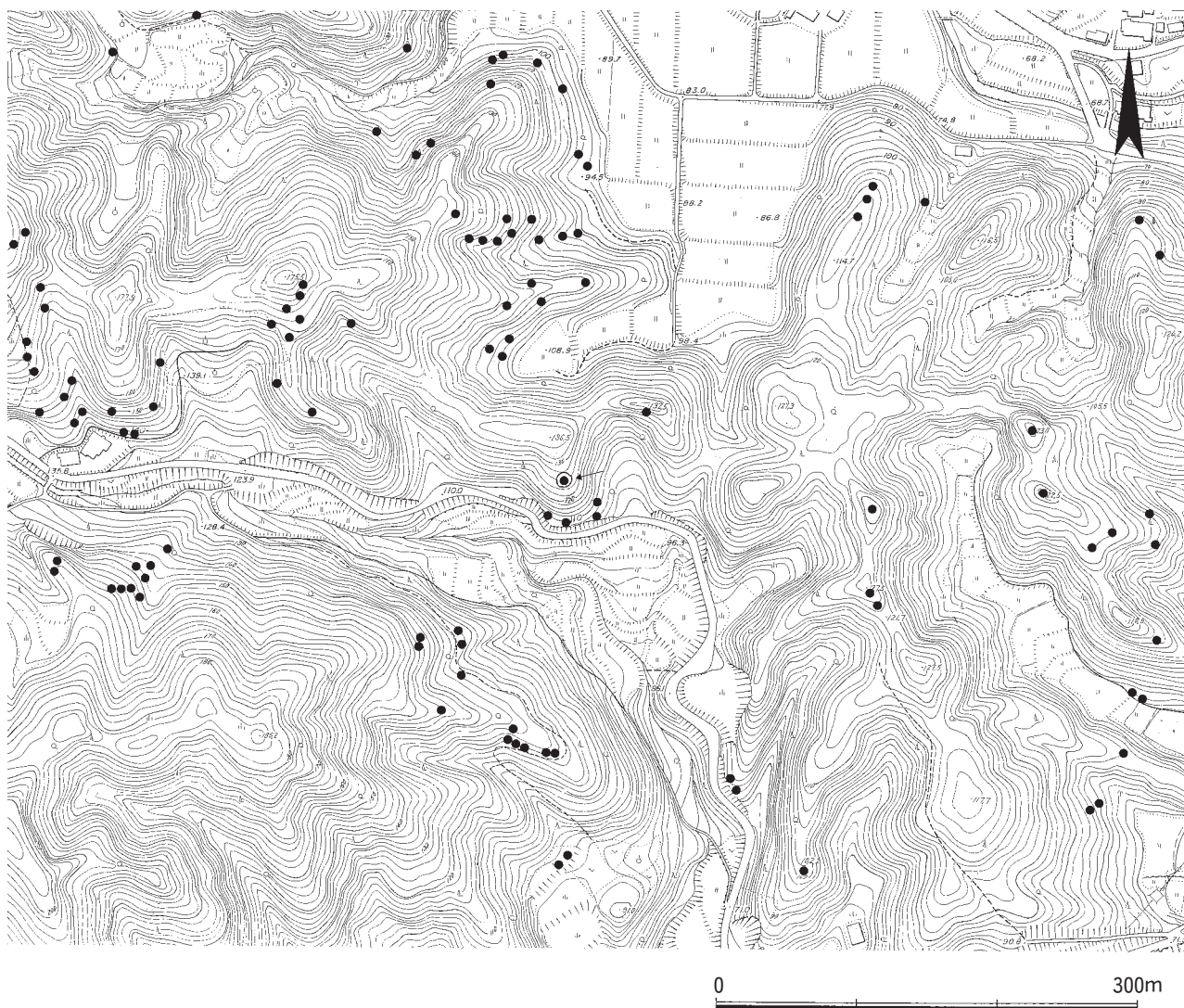


図2 調査区位置図 (1/5,000)



## 第2章 ST101古墳の調査

### 1. 古墳の位置と現状

横井古墳群は、平成3年に実施された踏査では、8支群75基程度の横穴式石室古墳の存在が確認されている。今回調査を実施した古墳は、本古墳群の中にあってもっとも手前（南東側）の支群にあり、この支群の丘陵頂上部から一段下がった位置に位置する。本支群では現状で4基の古墳が確認されるが、これらの中では最も高所に単独で造営されており、群集墳中の1基としては、他の古墳とやや隔絶した立地状況といえる。玄室床面の標高は125.2m程である。

調査前この丘陵は雑木林となっていた。古墳は、石室が崩落し、奥壁石材の一部が露出した状況であった。なお、横井古墳群の調査は今回が最初となるので、この支群を1区とし、今回調査した古墳を横井古墳群ST101古墳とした。

### 2. 墳丘・外部施設

古墳は僅かな高まりを見せて埋没していたが、墳丘は削平を受け、もとの盛土はわずかに残されていた部分も植生による土壌変質により全く遺存しない。腐植土の表土を除去した結果、地山整形は石室を中心に径11.5m程の範囲を不整形に削りだして墳丘基底面としているのを確認したが、大きな整地はなされていない。石室はこの不整形の墳丘基底面の中心からやや右に寄って築造される。

墳丘列石が墳丘基底部裾に部分的に僅かながら残存していた。もとは全体を巡っていたものとおもわれる。墳丘列石は羨門部に接続するが、この石室開口部両端の列石は数段で面を持たせて仕上げしており、装飾効果をもたせたものである。

### 3. 埋葬施設

南に開口する単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。天井部は崩落し、玄室の奥壁及び両側壁については腰石の上2～3段の壁体が残存するが、あとは腰石のみが原位置をとどめる状態で検出された。ただ、玄室内部は未盗掘の状態で、床面に土器が供献された状態のままで残されていた。

等高線にほぼ直交して設定される石室堀方は、墳丘基底面やや右寄りの石室構築プランに沿って3×4mほどの隅丸方形に掘削している。石材はすべて花崗岩の転石を用いる。規模は石室全長2.6m(推定、前庭側壁とみられる部分を含めた現況では3.4m)、玄室中央長1.51m、中央幅1.4mを測る。奥壁は腰石に1.2×0.3m程の横長石材を横位に据え、両端は小石材を載せて目地を合わせる。この上は長方形石材を積み上げ、隙間には小礫を詰める。左側壁は、腰石に1.0×0.4m程の横長石材、0.3×0.5m程の縦長石材を配し、上に横長石材を2～3段横積みにして、上段は方形石材を積み上げている。右側壁も同様で、0.8×0.3m程の石材3石(うち1石は欠失)を据えて腰石とし、さらに長方形石材を横積みにして、小型石材を

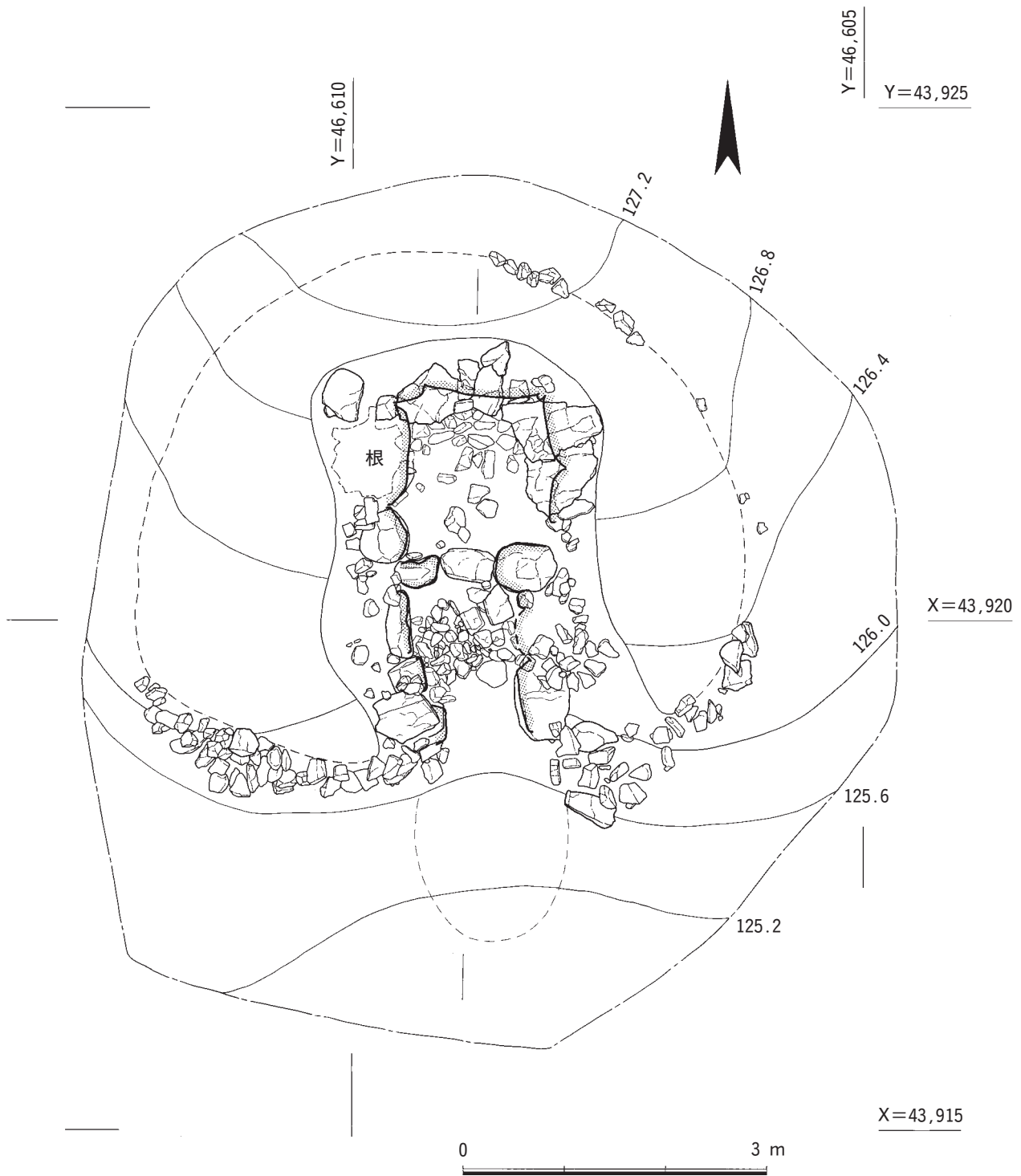


図3 調査区平面図 (1/60)

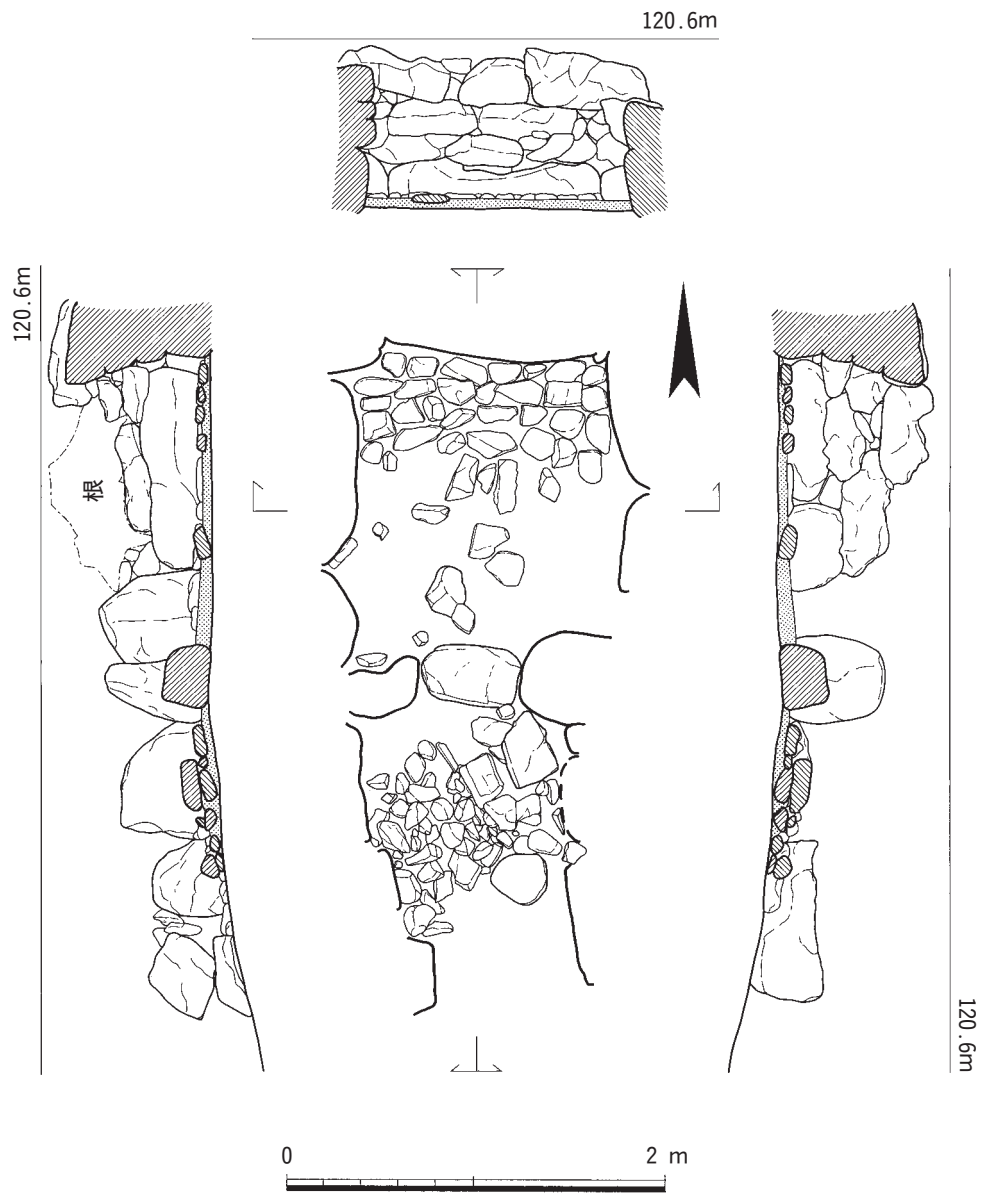


图4 ST101古墳石室 (1/40)

小口に積み上げる。左右側壁とも石材の積み方は雑で、目地の通りも不明瞭である。玄室の床面は奥壁側約2/5程度に礫を敷き詰めて屍床としている。玄門部は左袖石に0.4×0.6m、右袖石に0.6×0.6m程の柱状石材をそれぞれ立て、床面には仕切石を配する。玄門幅は0.5mを測る。

羨道は腰石の状況から0.8m程度まで天井石が架構していたものと考えられる。したがってこの手前は前庭側壁ということになる。前庭側壁は石室本体同様の石材でつくられており、先端はほぼ直角に外護列石に接続する。羨道部には礫が敷かれたように残されていたが、これは玄門手前から羨道一杯に礫を雑に積み上げていたと推定される閉塞施設の残欠である。

#### 4. 出土遺物

玄室床面、羨道、墓道部および墳丘より須恵器・土師器が出土した。金属製品等は残片もふくめて一切出土していない。1～9は玄室床面から原位置のまま検出された。蓋と坏のセット1、蓋と高杯のセット3と長頸壺の組み合わせで、蓋は4点すべてがつまみ部を下にして置かれていたが、うち高杯は高杯を重ねており、いずれも「皿」として使用していたことがわかる。これら玄室内出土の土器が同時期に供献されたことは間違いがないが、須恵器の型式としては3、4（製品としては本来セットではない）が他よりも1型式古くなる。

10～13は羨道、15～17は墓道から出土した。これらはおそらく初葬時に玄室に供献されていたものが追葬時に取り片付けされた際にまぎれ込んだのであろう。18、19は墳丘右手前付近の墳裾部分から出土した。

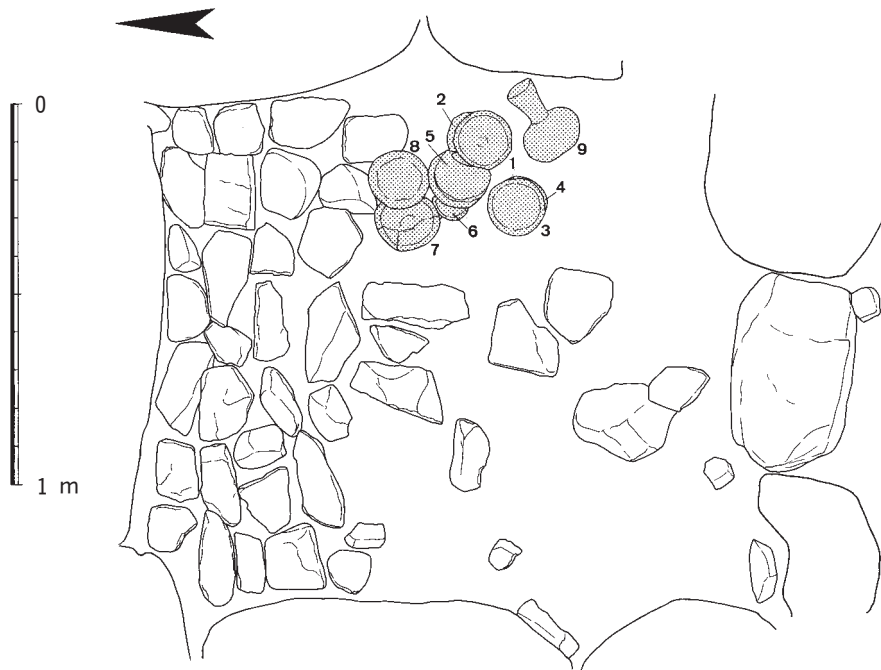


図5 ST101古墳玄室床面遺物出土状況 (1/20)

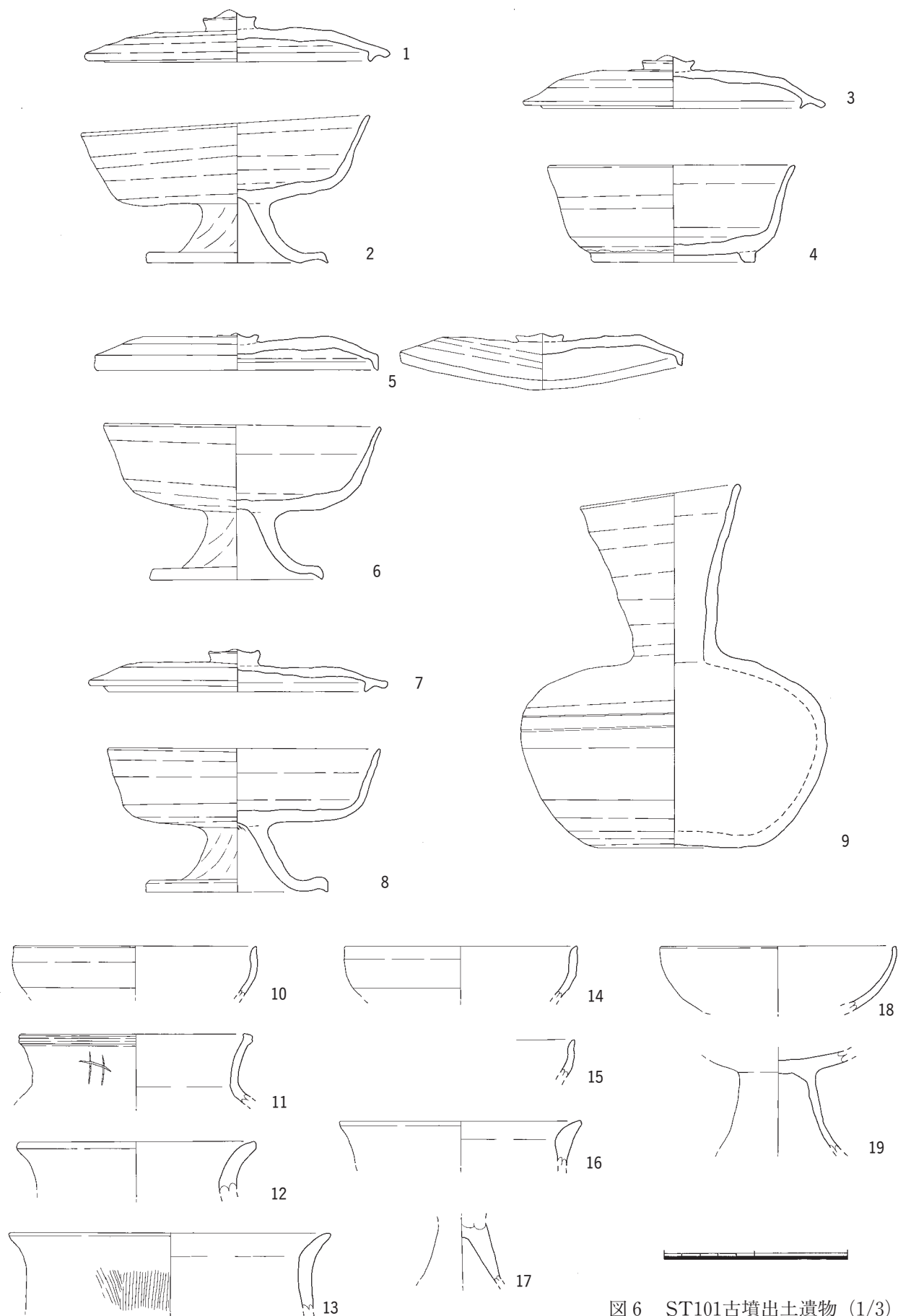


图6 ST101古墳出土遺物 (1/3)



表1 ST101古墳出土土器

No.	出土位置	種別	器種	法量 (cm) 口径×器高	胎土	焼成	色 調 ( )は内面	残存状態	備 考	登録番号
1	玄室床面	須恵器	蓋	14.6×2.8 つまみ3.0	2 mm 以下の 砂粒を含む	普通	灰 (灰褐)	完形	2 とセット	030059
2	玄室床面	須恵器	高杯	15.7×7.6 裾部10.0	2 mm 以下の 砂粒を含む	良好	灰	完形	1 とセット	030051
3	玄室床面	須恵器	蓋	14.1×2.8 つまみ2.7	2 mm 以下の 砂粒を含む	普通	青灰	完形	4 とセット	030057
4	玄室床面	須恵器	坏	13.5×5.3 底部8.8	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	灰	完形	3 とセット	030053
5	玄室床面	須恵器	蓋	15.6×2.0 つまみ2.3	3 mm 以下の 砂粒を若干含む	普通	青灰	完形	6 とセット 大きく歪む	030055
6	玄室床面	須恵器	高杯	15.2×8.5 裾部9.4	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	褐灰	完形	5 とセット	030054
7	玄室床面	須恵器	蓋	14.1×2.3 つまみ2.9	3 mm 以下の 砂粒を若干含む	普通	褐灰 (灰)	完形	8 とセット	030058
8	玄室床面	須恵器	高杯	15.0×7.8 裾部10.0	3 mm 以下の 砂粒を若干含む	良好	灰	完形	7 とセット	030052
9	玄室床面	須恵器	長頸壺	8.8×19.3 底部9.4	3 mm 以下の 砂粒を若干含む	良好	暗灰	完形		030056
10	羨 道	須恵器	坏	(13.6)×<2.6>	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	灰	口縁～体 上部		030061
11	羨 道	須恵器	甕	(12.6)×<3.8>	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	灰	口頸部	へラ記号あり	030060
12	羨 道	土師器	甕	(13.2)×<2.8>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	良好	橙	口縁部		030068
13	羨 道	土師器	甕	(17.6)×<4.2>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	良好	橙	口縁～体 上部		030067
14	墓 道	須恵器	坏	(12.8)×<2.7>	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	褐灰	口縁～体 上部		030064
15	墓 道	須恵器	坏	× <2.0>	1 mm 以下の 細砂粒を含む	普通	灰	口縁部		030065
16	墓 道	土師器	甕	(13.2)×<2.4>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	良好	橙	口縁部		030066
17	墓 道	土師器	高杯	<3.3>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	良好	橙	脚上部		030069
18	墳 丘	土師器	高杯	(13.0)×<3.6>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	普通	黒褐 (橙)	坏部		030062
19	墳 丘	土師器	高杯	坏基部 (4.2)×<5.3>	1 mm 以下の 微砂粒を含む	普通	橙	坏底～脚 上部		030063

### 第3章 まとめ

横井古墳群 ST101古墳は、7世紀後半に築造された古墳である。石室形態をみると、羨道および前庭側壁をあわせた長さが石室全長に匹敵することと、羨道の幅が玄室のそれとほぼ同じである状況から、石室規模が次第に小型化し、いわゆる小石室墳が成立する過程を示しているものといえよう。調査の中で特筆される点は、玄室床面から9点の須恵器が原位置のまま出土したことである。玄室内の袖石に近い部分、被葬者の頭部そばに供献されたとみられる状態で検出された例は、鳥栖市近辺では、東十郎古墳群第2区18号墳、第3区5号墳や水呑2号墳、3号墳などが知られる。蓋を逆さにして「皿」として扱い、坏に重ねた状況は、使用の実際を示すものとして興味深い。

あと、本墳の玄室床面は室奥壁側半分程度に扁平な礫を敷き詰めて「屍床」をしつらえており、この時期の埋葬の実態を示している。ただ、羨道および墓道から土器片が出土しており、追葬が行なわれているものとおもわれることから、この床面の状況は築造当初からのものか、あるいは追葬時に手を加えられたものなのかはわからない。今回の調査は、1支群の1基の古墳のみであるが、終末期群集墳の様相としては、遠望のきく丘陵の頂上付近に単独で築造されている点が、他の密集型群集墳とは立地的な相違がみられることを指摘しておきたい。

# 写真図版

1. 調査区遠景 (南西から)



2. 調査風景 (北から)



3. ST101古墳全景 (南から)







1. 墳丘基底部（北東から）



2. 墳丘前面列石（東から）



3. 同 左部分（南から）





1. 玄室奥壁（南から）



2. 同 左側壁（東から）



3. 同 右側壁（西から）





1. 玄門袖石（玄室から）



2. 玄室床面（前室から）



3. 供献土器検出状況（西から）





1. 供献状態の復元



2. 出土遺物



鳥栖市文化財調査報告書第 72 集

# 横 井 古 墳 群

平成 16 年 3 月 26 日 印刷  
平成 16 年 3 月 30 日 発行

編 集 鳥栖市教育委員会  
発 行 鳥栖市宿町 1118 番地  
印 刷 大同印刷株式会社  
佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20